

# あんげろす

## 紙野柳蔵さんの発言記録

永野茂洋

カネミ油症事件の最初期の被害者であり、「被害者の会全国協議会」の初代会長として公害訴訟の先頭に立った、紙野柳蔵さんの発言記録『テントの中から第2集』（紙野柳蔵発言集）を初めて読んだときの衝撃を今でも忘れることができない。カネミ倉庫株式会社前の路上に自らの身体を投げ出して、3年8ヶ月、来る日も来る日も座り込み、その路上から日本企業の非人間性を問い、それを許す日本社会のあり方を問い、自らの信仰の揺れと日本の教会の無関心を問い、そこから聖書の言葉をとらえ直そうとした。「私たちは街頭に出てチラシを配る。カネミの前に座る。それはみな敵の前です。対立があった。誰も行きたくありません。『行け』というのは、私の意志ではありません。そこに招く方は、十字架の主であるということ。もし十字架が聖壇にあるとしたら、あれは大きな間違いであるということを考えなくてはなりません」。

彼の考察と表現を日本から発信されたアジアの民衆の神学として、アジア文脈のキリスト教史の中に正當に位置づけていくことは、「アジア神学セミナー」の重要な課題であり、キリスト教研究所の重要な使命ではないだろうか。



中国における賀川豊彦を追跡する

—「宋美齡のラジオ放送」伝説をめぐって— (下)

金丸 裕一

(三)

この仮説を検証するためには、政策決定過程に対する分析が必要になります。幸いなことに、蔣介石の側近たちによって記録され続けた大部の起居注である『蔣中正總統檔案 事略稿本』があり、いまでは誰でも閲覧ができます。これを読み進めているうちに、不可解な事態に直面しました。1934年4月15日の項目において、その全訳が丁寧な楷書で筆写されています。書記者の苦勞が偲べれますが、ここでは更に「是夕夫人以新作『我的宗教觀』一文就正于公。公甚称之。後此文刊載于『美国論壇』雜誌」とある通り、蔣介石への意見を求めた結果としての作品だと明記されておりました<sup>1</sup>。そして、『事略稿本』に記録されたテキストは、1939年2月の官製全集たる『蔣夫人言論集』の文章と、まったく同一なのです。公刊に先立つ5年も前に、翻訳では既に賀川の名が「消されていた」のでした。

この削除に、如何なる判断が働いていたのかについて、『事略稿本』は何も語りません。もしかしたら、Toyohiko Kagawa という固有名詞が漢字に変換できなかっただけなのかも知れませんが、先に英文で見た通り、当該部分には単に賀川の姓名だけではなくて、次の重要な事柄が記されます。省略なしで掲載された (f) 広学会版から引用しましょう<sup>2</sup>。

現在我時常為日本人民禱告、因為他們中間也有許多好人、譬如賀川豊彦之流、他們反对他們政府的侵略行為、而對於中國人民是深表示同情的。

<sup>1</sup> 周美華編註『蔣中正總統檔案事略稿本』25 (国史館、2006年) 471頁。

<sup>2</sup> 宋美齡女士原著・明燈記者訳述『我的宗教經驗譚』(広学会、1934年7月) 5頁。

余談ですが、これまで検討した素材の日本語訳に「私に対する宗教の意味」(蔣宋美齡著・長沼弘毅訳『わが愛する中華民国』時事通信社、1970年)があります。同書は、*Madame Chiang's messages in war and peace*, Hankow: China Information Committee, 1938. からの和訳であるため、賀川豊彦の名前は登場します。しかしながら、英語版や日本語訳を以て中国語世界における評価一般と見做すことは、以上で簡単に分析した結果からも判明する通り、些か危険だと思われまふ。

(四)

こうした事柄を帰納すると、黒田四郎牧師がいう1939年12月の「宋美齡ラジオ放送」とは、既に数多く流布したテキストを、誰かが何らかの目的で「代読」乃至「紹介」した可能性は残ります。しかしながら、中華民国のファーストレディーたる宋美齡みずからこれを国内向けに放送したという状況は、歴史的に想定できません。この点に関連して是非とも紹介すべきは、国史館で公開される外交史料でしょう。詳細な分析は別の機会に委ねますが、1940年3月時点において対華僑破壊工作首謀者の一人として賀川豊彦の名前が挙げられ、各方面に警戒が呼び掛けられます<sup>3</sup>。いずれにせよ、戦時期における中国側からの高い評価云々といった語りは、もはや我等から自主的に破棄すべきです。

同様に、日本敗戦後の「以德報恩」政策の生みの親であったという珍説について、戦後の蔣介石政権側に立つ二人の人物による冷めた突き放しを通じて反駁してもらいましょう

まず、『自由中国』東京特派員だった余蒼白のコメントから。同誌は、昔日の賀川と親交があった文化人兼政要の胡適と、京都帝大出身で不屈の言論人として名高い雷震が、中共政権成立直後に台北で刊行した雑誌で、台湾民主化の思想的源流に位置づけられるメディアです。「聖誕節在東

<sup>3</sup> 〈汪政権海外活動破壊抗戦〉、1940年～1942年、《外交部》、国史館蔵、數位典藏號：020-010114-0007。

京」と題する1951年末のレポートでは、新日本建設キリスト運動の背景や動向が紹介され、賀川がそのリーダーであると伝えますが、そこにこう記されます<sup>4</sup>。

この宣教運動で特に注意すべきは、(1946年)当時GHQが組閣の中心に担ぎ上げようとした賀川豊彦を中心に展開していることだ。賀川は戦時期にはルーズベルトを揶揄してアメリカを罵倒した、あらゆる悪事をやってのける上帝の信徒である！

ついで、台湾社会学の父と呼ばれた学者・龍冠海による回顧です。お弟子さんからは、民主化政権誕生後に国策顧問などを歴任した蕭新煌教授など、多士済々の精鋭が輩出しています。そんな彼が米国留学中、満洲事変に際して書かれた詩(「何故か」や「悩みの子」でしょう)を読み賀川豊彦に関心を抱いたが、その言説を追うと複雑な思いとなり遂に直接手紙を出した経緯、さらに保管してある文面を詳細に紹介しますが、賀川に対する総括的評価は、次の内容でした<sup>5</sup>。

賀川が日本の中国侵略戦争中になした言行を観察していると、むしろ私は失望させられた。……だから私は賀川と彼の国家に対する反感、及び賀川自身に対する期待を手紙に託したのである。……(この手紙が英文秘書から手渡されたのか否か等々、もはや確認する術もないが)彼個人の名声も日本の国運没落ととも地に落ち、少なくともアメリカ人は賀川を日本のガンディーだと持ち上げることはなくなった。

ちなみに日本敗戦後における台湾キリスト教界は、現在では独立運動の信仰的砦となっている台湾基督長老教会を含めて、二・二八事件などの苦難に遭っても、政権とは近

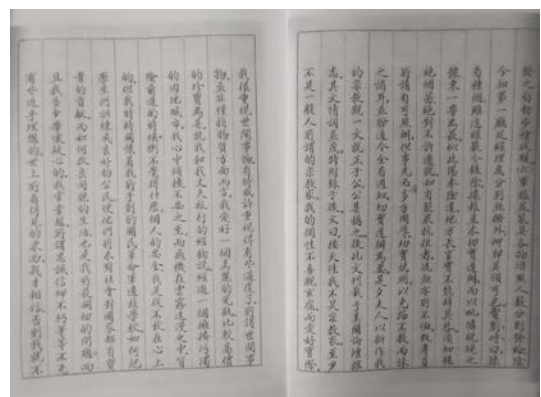
しい関係を保ちました<sup>6</sup>。要するに、中共との内戦時期や台湾移転後を含めて、中華民国蔣介石政権の政策的判断に、賀川豊彦の個人的事蹟が影響した可能性は、限りなくゼロに近いと断言せざるを得ません。でも、それで良いのです。

そもそも「偉人」の営為に寄り頼んで信仰の姿を語る発想そのものに、大きな陥穽があるからです。都合に合わせた取捨選択はいけません。蔣介石や宋美齡による白色テロでの大量虐殺も、すべてが神に由来する行為だったのでしょうか？

その行動があまりに超人的であり、また多くの人々の生活に対して計り知れない作用を及ぼし続けてきたが故に、今回みたような「伝説」が生まれてきたのだと思います。さらにいうと、「伝説」の分析によっても、その人物の時代における役割の大きさを語るができるのかも知れません。

しかしながら、日本キリスト教史において類稀なる異能の士であった賀川豊彦先生は、たとえ等身大の姿に戻ったとしても、なお我等に数々の示唆を与えてくださる人物です。特に現在、アジアとわたくしたちとの関わり方が微妙な状況になりつつあります。いたずらに中国や韓国との対立を煽る牧会者も出現し始めました。それゆえになおさら、信仰の先達による働きを振り返り、信と知とを少しでも接近させるべく、学び／祈り続けたいと思います。(了)

かねまる・ゆういち (協力研究員)



<sup>4</sup> 余蒼白「聖誕節在東京」(『自由中國』6-2、1952年1月)28頁。

<sup>5</sup> 龍冠海「留美回憶的一章(続完)」(『伝記文学』2-3、1963年3月)13~14頁。

<sup>6</sup> 鄭睦群『從大中華到台湾國—台湾基督長老教會の國家認同及其論述轉換』(国史館・政治大学出版社、2017年)を参照。

種を蒔く

——「総合学習台湾」研修旅行報告——

岡村 淑美

『明治学院百五十年史』に携わって以来、戦前戦中期の明治学院への留学事情研究が私のライフワークとなっている。その成果の一つは、年に一度担当している「明治学院研究 I」であり、もう一つは明治学院高等学校（以下白金高校）の「総合学習台湾コース」である。

白金高校の総合学習は、週一コマの座学と3泊4日程度の研修旅行で単位認定している。コースは六つ用意されており、台湾コースはその一つで、私が立ち上げたコースでもある。かつては青森下北コースがあったが、東日本大震災以降福島第一原発事故の風評被害や現地の受け入れが困難となったのが要因で廃止となり、2017年度に新設されたのが京都と台湾コースである。

ちょうど先日、今年度で2回目となる台湾研修旅行が無事終了したので、その模様を紹介したい。3泊4日のプログラムは次のとおりである。

◆1日目 12/19

午後 松山空港到着後、故宫博物院、中国国民党忠烈祠見学  
夜 士林夜市で夕食（自由行動）

夕食後 開校礼拝（台北 YMCA）

◆2日目 12/20

午前 新幹線で移動、烏脚病治療記念館、北門嶼基督教会  
訪問、見学

午後 嘉義大学見学および構内散策（嘉農棒球史料室見学）、  
嘉義北回帰線記念碑見学

夜 新幹線で台北に帰る。

◆3日目 12/21

午前 台北中心部の散策、クリスマス礼拝（台湾長老教会済  
南教会）、

午後 現地大学生ガイドによる台北市内班別行動

夕食後 閉校礼拝（台北 YMCA）

◆4日目 12/22

午前 中正記念堂、二二八平和公園、国立博物館見学

昼食後 松山空港より帰国

身近な外国の台湾は、中学高校の修学旅行先として近年大人気だが、私が台湾コースを新設したのには、「教育」というものの大切さを自分たちの先輩の歩みを通して知り、キリスト教主義学校で学ぶ意義を知って欲しいという願いからだ。そのため、旅行会社の用意したプログラムだけでなく、明治学院旧制中学部で学び、風土病（烏脚病）の無料診療と社会復帰支援にその生涯を捧げた故王金河の烏脚病治療記念館や、日本統治時代に明治学院神学部出身者が歴代牧師を務めた台湾基督長老教会済南教会の教会堂をお借りし、クリスマス礼拝と教会の方々との交流を取り入れている。また台湾基督長老教会国際日語教会のうすきみどり牧師には、本校聖書科の佐原教諭と同志社大学神学部で同期だったというご縁もあり、多大な協力をいただいている。

烏脚病治療記念館では、王春満氏と北門嶼基督教会の潘亞欣伝道師が迎えてくださった。旧診療所に併設の北門嶼基督教会は、烏脚病で苦しむ人たちの心の拠り所として造られた教会で、患者数の減少とともに信者数も減ってしまったが、王金河の思いを引き継いでゆくために再び教会活動を活性化させている。今回は、私たちが来るということで、郭得烈元台南神学院教授も駆けつけてくださり、日本統治時代の日本語教育世代として、また多言語を学んだ経験から生徒たちにその思いを話してくださった。

台湾研修旅行ではどこでも熱烈な歓迎を受ける。もちろん、今の台湾は全般的に親日の様相で、どこの観光地でも日本語は通じ、人々も友好的である。それに輪をかけて、烏脚病治療記念館や済南教会では、わざわざ日本から、それも自分たちとは縁深い明治学院から生徒たちが来るといふことに対し全力で歓迎の意を表し、またさまざまな人がこの日のために訪ね、子どもたちと交流して下さることに、生徒たちも大きな「愛」を感じている。そしてその「愛」

<sup>7</sup> 2002年に総合学習が始まった当時は、沖縄、長崎、田舎暮らし（新潟）、韓国、青森下北の5コースであったが、2012年度に青森下北コースは廃止となった。

は、キリスト教信仰に裏付けられたものであり、キリスト教主義学校ならではの学びとなっている。

濟南教会の林良信長老から、「どうぞ先生方は子どもたちに種をまいてください。それがやがて育って大きく羽ばたく大人になることでしょう。それが教育です」という言葉をかけていただいた。「種」ともいえるこの総合学習での学びが、どのように子どもたちを成長させるかは未知数である。しかし、この学習をきっかけに、中国美術を大学で専攻に決めた生徒や、進学先として最初から台湾の大学を目指す生徒も生まれている。蒔かれた「種」は既に芽吹いている。やがてそれがどう成長していくのか。林長老の言葉に、キリスト教主義教育の神髄に改めて気づかされた。

台湾という地で、諸先輩方が蒔いた種が、百年近くの年月を越えて再び生徒たちと台湾を結びつける機会となったことも、「種を蒔く」ことの意義を示している。

おかむら よしみ（協力研究員）



1 北門嶼基督教会にて



2 濟南教会にて

子どもたちの希望の灯、エルシステマ

吉原 功

2013年5月、ベネズエラの港町ラグワイアを訪れました。前年夏に約3週間、ピースボートの船上などで時間を共にし、練習や演奏を間近で見聞させてくれた若き音楽家たちに再会するためです。彼らの練習風景を目の当たりにして、彼らの育ったエルシステマという音楽教育プログラムの核心に触れる思いがしました。例えば、練習で彼らはよく議論します。曲の解釈や演奏法などについて8歳のトランペット奏者、16歳のバイオリニスト、19歳のチェリスト、21歳のビオラ奏者などが激しく、自由に意見を言い合うのです。それでいて彼らはとても仲良しで素晴らしいハーモニーを作り上げていました。

ラグワイアの練習場で私たちを迎えた彼らがまず案内してくれたのは、なんと聴覚障害の子どもたちの教室でした。東北大震災からの復興を願う日本の歌「花は咲く」をピアノ演奏に合わせ、微笑みながら手で、身体で表現して私たちを歓迎してくれました。

「聞こえない」子どもたちを教えるのは大変なのは、と先生に聞くと「一番苦労したのは、親や施設や学校で子どもたちをこのプログラムに参加する許可をもらうこと」という答えが返ってきました。親はいじめられることを心配し、施設の職員や学校の先生は「耳の聞こえない子に音楽なんて」と反対したといいます。どうかして参加してもらった子どもたちの変化をみて親も先生も練習場に来て一緒に活動するようになったそうです。私たちの目の前で、「健常」の子どもたちが手話を使い「聞こえない」子どもたちと屈託なく遊んでいました。

エルシステマは1970年代中頃、貧困街の子どもたちに楽器の面白さに触れてもらうことから始まりました。音楽を楽しむことで、犯罪から身を守り、社会人として立派に育ってくれることを願ってのことでした。政府、とりわけチャベス政権以降の政府の支援も受けて急速な発展をとげ、現在では約100万人がこの無料のプログラムのなか



で生活しているといわれます。世界トップレベルの指揮者や演奏家、オーケストラを輩出すると同時に、さまざまな障害を持つ子どもたちのプログラムも工夫されるようになりました。ラグワイアの教室はその一つだったのです。「花は咲く」を「演奏」してくれた子どもたちの笑顔を忘れることができません。

エルシステマのプログラムは世界に広がっています。日本にも福島県相馬市と大槌町、長野県駒ヶ根市に子どもオーケストラや合唱団ができています。そして2017年、「聞こえない」子どもたちのためのプログラムがはじまりました。ベネズエラでは、聴覚障害者が白い手袋をつけて「コーラス」をすることから「ホワイトハンドコーラス」と呼ばれています。それに倣って「東京ホワイトハンドコーラス」という名称がつけられました。

そのホーム・ページを見ると次のようなコトバが掲げられています。「子どもたちの“自己表現の”の場」「学校や家庭以外の安心・安全な場所での主体的で相互的な学び、自己肯定感の醸成」、「共創性の理念により育まれる他を思いやる心」「音楽性を追求することでの自律心、自尊心」「地域内外の人と広くコミュニケーションを取る機会による多様な刺激」「社会をより包括的に構築していく子どもたちの力」「みんなが自分らしさを大切にしながら互いに思いやれる社会」。これらはみなベネズエラのプログラムと重なる理念であり目標であると思います。

「東京ホワイトハンドコーラス」は17年10月に続いて、昨年12月に2回目のコンサートを東京芸術劇場で開き、観客を魅了しました。ベネズエラで有名な障害者チーム「ララ・ソモス」との共演です。相馬市、大槌町、駒ヶ根市の子どもオーケストラも応援に駆けつけました。この舞台には視覚障害の子どもたちも登場しました。

「声隊」と名付けられた彼らが、「サイン隊」と名付けられた聴覚障害チームの練習に合流したのは7月。「声隊」と「サイン隊」の練習や交流を通して子どもたちが成長していく姿を追った番組が「NHK ハートネットTV」枠で12月末放送されました。感動的です。

17年2月、「聞こえない子ども」たちが「上を向いて歩こう」を練習しています。手話だけでは歌になりません。「涙がこぼれないように」をどのように表現するか？一人ずつ前に出て案を出します。「本当は涙が出ちゃってるから、涙を吹きながら上を向いて首を振る動きをつけたら」など分析的に考える子どもたち。自宅で先生のDVDを見ながら懸命に練習をする子。今までにない家族との積極的なコミュニケーション。

7月、「エーデルワイス」の練習、「見えない子」には白い花が一人ひとりに渡される。触ったり匂いをかいだりして歌詞の情景を想像する。「聞こえない子」は写真を見ながら「白い花」をどのように表現するか、イメージを膨らませる。みんなの案を参考にしながら先生たちが最終的な手と身体の動き―「手歌」―を決める。「声隊」の歌と「サイン隊」の「手歌」、なかなかそろわない。懸命に練習する。「声隊」「サイン隊」の一人ひとりがペアとなって教え合う。動くときは「聞こえない子」が「見えない子」の手を引き、「見えない子」は「聞こえない子」に手話を教える。ベネズエラの歌を練習することになって、スペイン語を一生懸命勉強する子。憧れの「ララ・ソモス」のメンバーと話をするために。

こうしたプロセスのなかで子どもたちは「狭い世界」から抜け出し、積極的に他者との交流を持とうとし社会性を身につけていく。そう確信させる番組でした。「東京ホワイトハンドコーラス」は一步一步その目標に近づいているように思います。今年19年3月、新しいプロセスがまたはじまるそうです。

エルシステマ誕生の地ベネズエラは現在大変な混乱にあるようです。日本のメディアは米国の多くのメディアにしたがって、「独裁的大統領の経済政策が失敗、ハイパーインフレをおこし人権を抑圧している」と報道しています。一方、国連人権委員会の専門委員アルフレッド・デ・ゼイヤス氏は、2017年2月の調査に基づき、同国に対する「米国の経済制裁が原因」とする報告書を提出しています。世界の子どもたちに希望の火を灯しているエルシステマが、

この混乱のなかで消えることのないよう祈るばかりです。

雑録

植木 献

よしはら いさお (明治学院大学名誉教授)



「花が咲く」を演奏してくれた「耳が聞こえない」子どもたち



明治学院を訪れたエルシステマの若き音楽家たち (2012年夏)



白金アートホールで演奏するエルシステマの音楽家たち

キリスト教はすでに欧米の宗教ではない。ワールド・クリスチャン・エンサイクロペディアによれば、1900年の時点ではクリスチャンの82%がヨーロッパと北米に住んでいた。しかし、1世紀後の2000年には同地域のクリスチャン人口は4割を切り、6割近くをアジア、アフリカ、ラテンアメリカが占めるに至った。20世紀のキリスト教の変動の大きさはこうした統計的なことを見るだけでもよく分かる。信仰の遺産は依然として欧米の貢献が大きい、日々を生きるクリスチャンはその外の世界に住む方が多いのである。

このことは知識としては知っていたし、授業でも学生たちに伝えてきたことであるが、キリスト教研究所が3年前からアジアのキリスト教に焦点を当てるようになってから、その実態を経験することが増えた。講演会や研究会でも韓国や中国から発題者を招き、討論を経験すると、恥ずかしながらほとんど理解できない韓国語、中国語の世界にも向き合わざるを得ない。その時に、日本の経験以外見えていなかったことを痛感させられたのである。以前は欧米とアジアという比較の視点で何かを考えているつもりでいても、狭い日本の視点からしか考えられていなかったことに気付いたからだ。

どれだけ情報を得るための技術が進歩したとしても、直接同じ空間で会って話をするという単純素朴な身体的経験が視野を広げ、思索を深めるためには重要だ。20世紀のキリスト教の大きな変動は、こうした無数の経験の積み重ねの結果起きたのだとしたら、この3年間研究所の主任としての経験はささやかながら私にとって不可欠のものだったと言える。

今年度3月を持って主任を退任することになりました。これまでみなさまからご協力・ご意見をいただいたことに感謝申し上げます。

うえき・けん (主任)

研究所活動 (2018年12月～2019年3月)

日韓キリスト教史国際カンファレンス

開催日時: 2018年12月1日(土) 10:00-17:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎 本館9階 92会議室

発表① 徐元模 (長老会神学大学 教授)

「ヴァリニャーノの『キリスト教信仰教理問答書』の研究」

発表② 三好千春 (南山大学 人文学部キリスト教学科教授)

「キリスト者浅川巧と朝鮮」

発表③ 松山健作 (キリスト教研究所 協力研究員)

「聖公会の在朝日本人伝道

—英国人宣教師バジル・シンプソンの報告を中心に—」

白金校舎内キャンパスツアー 担当: 植木主任

発表④ 金石主 (長老会神学大学 教授)

「在日大韓基督教会が南北平和統一運動に及ぼした影響

—東京会議を中心に—」

発表⑤ 李相勲

(延世大学韓国基督教文化研究所専門研究員)

「在東京朝鮮諸教会の形成と接点

—1920年代半ばから1945年までを中心に—」

発表⑥ 李省展 (恵泉女学園大学 名誉教授)

「The Japan Evangelist と日清戦争

—ヘンリー・ルーミスの日清戦争論を中心として—」

総合討論

懇親会

開催日時: 2018年12月1日(土) 17:30-19:30

開催場所: 明治学院大学白金校舎 キリスト教研究所

3.1 独立運動100周年記念 特別講演会

開催日時: 2019年1月26日(土) 14:00-17:00

開催場所: 白金校舎 2号館2階 2301教室

共催: 明治学院大学 国際平和研究所

講演1 柳大永 (韓東大学教授)

「3.1 独立運動と韓国キリスト教」

講演2 李進龜 (韓国宗教文化研究所所長)

「3.1 独立運動と韓国天道教」

総合討論

コメンテーター 金興洙 (牧園大学 名誉教授)

崔起榮 (西江大学 教授)

宋賢康 (韓南大学 研究教授)

通訳兼コメンテーター: 徐正敏所長

通訳: 朱海燕 (本研究所協力研究員)

キリスト教研究所3月研究会

開催日時: 2019年3月15日(金) 15:00-17:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎 本館9階 92会議室

発表: 魯恩碩 (国際基督教大学教養学部上級准教授)

「ICUにおけるキリスト教教育 歴史・現状・課題」

応答: 植木献主任

「明治学院大学におけるキリスト教主義教育の可能性」

総合討論

懇親会

開催日時: 2019年3月15日(金) 17:10-19:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎 キリスト教研究所

アジアキリスト教史研究プロジェクト主催研究会

「近代日本の植民地主義と日本人クリスチャン

—シオニズムをめぐる戦前日本のキリスト教」

開催日時: 2019年1月22日(火) 16:00-18:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎 キリスト教研究所

講師: 役重善洋 (大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員)

明治時代のキリスト教資料研究プロジェクト研究会

「第1期 松山高吉とその周辺 第4回研究会」

開催日時: 2019年1月11日(金) 13:00-18:00

開催場所: 松山健作氏宅 (松山高吉未翻刻資料保管所)

講師: 松山献 (かんよう出版 社長)

コメント: 洪伊杓 (本研究所協力研究員)

テーマ: 『松山高吉著作選集』所収資料の書誌的考察



キリスト教文化・芸術研究プロジェクト主催研究会

「„Vom Stilo recitativo“

—どのようにレチタティーヴォを演奏するのか？」

開催日時：2019年2月18日(月) 18:00-20:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館 1253 教室

講師：クヌート・ショホ氏

(Knut Schoch, ハンブルク音楽院教授)

通訳：加藤拓未 (本研究所協力研究員)

キリスト教文化・芸術研究プロジェクト主催公開講演会

「音楽によるキリスト教の愛の表現 (その2)」

開催日時：2019年3月7日(木) 16:00-19:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館 1306 教室

発表：堀 朋平

(国立音楽大学・西南学院大学講師／本研究所協力研究員)

「聖書を読むシューベルト?——旧約の世界観を中心に」

司会・発表：加藤 拓未 (本研究所協力研究員)

「カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの中期の受難曲創作について」

2018年度第2期 「アジア神学セミナー」

【2018年度テーマ】 アジアキリスト教史

【開講日】 毎週月曜日 18:25~20:25

【開講場所】 明治学院大学白金校舎 1558 教室

12/3 現代社会とキリスト教3

アジアの声にどう応えるか

(山本俊正 関西学院大学教授)

12/10 アジアとキリスト教の未来—宣教論の再考

(徐正敏所長)



新着図書

・『福音と世界』No. 1、新教出版、2019。

・『福音と世界』No. 2、新教出版、2019。

・『福音と世界』No. 3、新教出版、2019。

・『キリスト教文化』2018秋号、かんよう出版、2018。

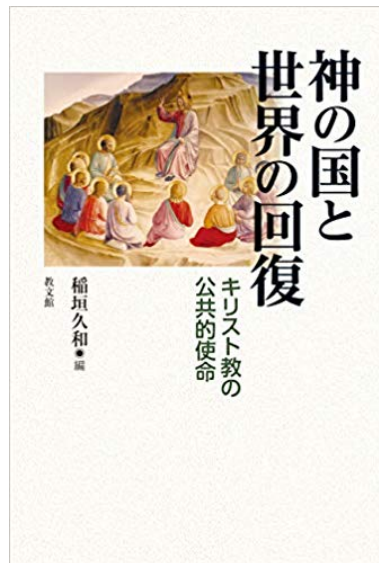
・『説教黙想 アレタイア』No. 108 特別増刊号、日本基督教団出版局、2019。

・『Ezekiel 38-48』 Stephen L. Cook 著、Yale University Press、2018。

・『ATD 旧約聖書註解 10 民数記』 マルティン・ノート著、大住雄一訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、2018年。

・『神の国と世界の回復—キリスト教の公共的使命』 稲垣久和編、教文館、2018年。(稲垣久和協力研究員寄贈)

・『改革派教義学 第7巻 終末論』 牧田吉和著、一麦出版社、2019年。(神戸改革派神学校寄贈)



---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第78号

---

2019年3月10日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩